

れてきたとは言い難い。また後の時代は、大戦勃発によって生じた世界の市場条件の激変を受けとめる生産力が日本に準備されていった時代であるが、その全体的イメージは依然として不明瞭なまま残されているように思われる。日頃、研究史の動向に以上のような印象を抱いていた評者にとって、高村氏を中心とした共同研究が日露戦後の経済分析に引き続き、「企業勃興」をその研究テーマに選ばれたということは、意を強くするものであった。

序章「松方デフレから企業勃興へ」(高村直助)は、対象時期の景況の転換と企業勃興の諸条件ならびにその具体的な過程を概括し、本書全体の中での各章の位置づけをおこなっている。与えられた紙幅の関係もあり、重複を避けるため、ここではさっそく各論文について個別に検討を加えていくことにしたい。

第一章「創業期の日本銀行」(神山恒雄)は、兌換制度確立を契機として生じた経済政策基調の消極基調から積極基調への転換と、財政、金融の分離によって日銀の活動が変化していく点を解明するとともに、日銀の国内民間金融が公債担保金融に大きな比重を傾けていくことで、市中の公債需要の確保とその順調な消化を実現し、企業勃興過程を資金面から積極的に支えると同時に、公債政策との両立をも可能にしたことを明らかにしている。

読後やや気になったのは、対象とされている「公債政策」が基本的に日銀を軸とするものであるため、対立の構図が、大蔵省の銀行分業主義的な理念的対応と、日銀の現実主義的対応の対立という産業資金供給問題をめぐる平面的な対抗関係の印象を強くしている点である。神山氏であれば、ここに大蔵省と日銀の公債政策に対する方針の差からくるもう一つの対抗線を導入することもできたのではなかろうか。加えて、指摘されているところの当該期における金利の低下と地域間の金利格差の相互の関係については、日銀の金融政策の展開がどの程度の効果を果たしていたのか、そして金利格差の前提である金融市場の地域的分断の未解消が企業勃興の地方的展開過程にどう影響したのか、という点についていまい少しご教示願いたかった。

第二章「道路建設と補助金政策」(長妻廣至)は、企業勃興の前提をなす交通網の形成過程を、道路建設と補助金政策の展開の中に展望しようとしている。当初明確な原則を有していなかった政府の道路建設方針が1870年代後半から80年代にかけて次第に体

高 村 直 助 編

『企業勃興』

——日本資本主義の形成——

ミネルヴァ書房 1992.3 326 ページ

本書は、編者の高村氏を中心として編まれた共同研究『日露戦後の日本経済』(塙書房、1992年)につづく、明治期日本経済についての共同研究の成果である。執筆メンバーも概ね前書と重なっている。明治期の日本経済に興味をもちつづけてきた評者にとって、前著について「企業勃興」を対象とした共同研究の成果が公刊されたことは、何より歓迎すべきことであった。

一時、明治期を対象とした経済史研究は、いささか沈滞の感を免れなかったが、この間注目すべき研究が続々と著され、明治期の経済史研究も新しい段階を迎えたという感が強い。しかしながら、この間の研究史の急速な蓄積にもかかわらず、依然として明治期の日本経済には解明されるべき論点が多く残されているように評者には感じられていた。時期的に言えば、第一次企業勃興の時代と日露戦後の日本経済が気になる。先の時代は、循環的変動が「産業革命」という構造的変化に帰結していく日本経済にとって特記すべき時期であったにもかかわらず、松方財政と日清戦後経営の間に挟まれて、そのメカニズムと具体的な展開過程についての検討が十分なさ

系化され、さらに国道を中心とした幹線網について国庫補助の制度化が進められるとともに、その目的が行政、軍事、貿易といったものから、地域経済の深化を目的としたものに移行しつつあったことが示されている。

道路行政について、その政策決定過程の手続きにまで立ち入って具体的に分析が加えられた点には教えられるところが多かったが、インフラ未整備による物流の分断が日清戦後の物価高騰の一つの原因となったとする政府部内の議論もみられることから、道路建設がどのような広がりやで企業勃興過程に物流面から影響を及ぼしていたのかについては、なお具体的な検討の余地が残ろう。

第三章「交通資本の形成」(小風秀雅)では、企業勃興の主導的な産業の一つであった鉄道業について、東西間の鉄道経営のおかれた条件の差異の分析を通じ、研究史上当該期の鉄道企業の性格規定に見いだされた理解のずれを整合的に捉え直そうと試みている。当該期の鉄道経営を官鉄、半官半民の日鉄とその支線の私鉄、自立建設・地元中心型である西日本の私鉄の三類型に分け、西日本型の私鉄が政府の鉄道政策の展開過程において著しく不利な条件を被り、90年恐慌の因果連鎖に巻き込まれつつ、経営を悪化させていったことを明らかにしている。

私鉄経営に東西間の地域的差異の観点を導入し、西日本型の私鉄の経営構造に照明をあてることによって、当該期鉄道投資の特徴と90年恐慌との関連を、この西日本型の鉄道経営に見いだす議論の展開はきわめて示唆的であった。読後気になった点を挙げるとすれば、これら関西の私鉄が経営的には著しく不調であったにも関わらず、株式の流通性が非常に高かったと指摘されている点である。その理由について本章ではかならずしも十分に説かれていないのが惜しまれた。

さて第四章「二千鍾紡績の蘇生」(高村直助)は、従来消極的に扱われてきた企業勃興期の二千鍾紡績に照明をあて、松方デフレ期に概ね経営不振に陥っていた二千鍾紡績が、企業勃興期に入ると良好な経営成績を納めるようになっていく条件を考察している。外部的条件としては、企業勃興期前半における高糸価と繰綿価格の相対的な安価さ、大都市部の賃銀上昇に対する地方賃銀水準の停滞性、さらに政府の棄損政策による資本整理促進などが挙げられ、内部的条件としては、中国綿の積極的利用、昼夜二交替制の採用、および設備規模拡大の進展が挙げられてい

る。このような企業の経営努力によって、二千鍾紡績の労働生産性はかなり向上し、機械効率でも大阪紡績を上回るものが現れてきたとされる。

論者自らによるこれまでの一万鍾紡績の展開過程についての分析に、二千鍾紡績についての新たな視点からの分析が重ね合わせられることで、当該期紡績業の展開構造がより立体的に再構成されたといえる。手慣れた分析に、評者としてつけ加えるところはさほどなさそうであるが、強いて挙げるとすれば、設備拡張の前提になった資金調達条件の地域的差異についての解明が、二千鍾紡績内部でのパフォーマンスの差との関係で、なお課題として残されているように感じられた。

第五章「筑豊炭鉱業の台頭」(高村直助)は、当該期の炭鉱業について筑豊を事例に具体的に分析し、筑豊の炭鉱資本が鉱業行政による制度的高コスト化と、資金調達の困難という制約条件の下で、高炭価を生み出す政策展開に支えられ、積極的に鉱区拡大と機械の導入を試みることで、出炭量を増大させ、また機械化坑比率も筑豊全体の過半を占めるようになっていたことを明らかにしている。

興味深かったのは、資金調達の低位性を迂回することを可能にした条件として、安価に機械を供給し得る地域密集的な造船、鉄工所の出現が指摘されている点であろう。このような鉄工業等の地域的な成立とその集積については、個別産業史の環境条件分析として今後も検討されていく必要があるように思われた。

第六章「機械工業の市場と生産」(鈴木 淳)では、従来企業勃興との関係で等閑視されがちであった機械工業が、その限界性を含め主題的に分析されている。まず機械類輸入の動向から、当該期の機械需要の拡大が1883年から86年までの軍需中心の時期と、その後1890年までの民需中心期に区分され、軍需中心の生産時期に軍工廠が重要分野での生産体制の整備と合理化を押し進めたのに対し、民需中心の後期に入ると、限定的ではあれ競争が定着し始め、民間の機械工業が新鋭輸入機械修理中心の大工場と、中小型船造修や機械類製造分野に展開した中小工場に分化し、以降の日本機械工業の構成がほぼ確立したと結論している。

明治期の機械工業についての研究史は、近年軍工廠史のレベルを超える蓄積を生み出しつつあるが、本論考もその一環をなす業績といえよう。とりわけ輸入代替的な機械工業が未成立であったことにより、

1890年恐慌のショックが機械輸入の調整によって吸収され、当該期機械工業部門の達成水準の低下を避ける結果となったという指摘は示唆的であった。

つぎに第七章「初期製鉄業と職工社会」(東條由紀彦)は、企業勃興期における製鉄業の決定的な立ち遅れの条件を、釜石を事例にとり、職工の流動性を軸としたたたら金山との関係の推移に見だしつつ、移植産業の離陸条件を「始動ユニット」として定式化しようと試みた野心的な論考である。論者は、近代産業の離陸にとって、伝統的な職工社会が一方では制約要因となりながら、他方ではその存在条件ともなるといふ両義的な性格を持っていたことを指摘している。

同職集団と複層的的市民社会概念を駆使して、当該期製鉄業の起趨の条件を解明するとともに、「企業勃興」という歴史的概念が単なる企業群の設立という事態を意味するものではなく、中枢的な同職集団を組み込んだ始動ユニットの持続的再生産の経営の実現と同職集団それ自体の自律的再生産の条件形成を意味するとして、従来の原蓄論に重大な修正を迫る論者の結論は鮮やかである。ただ「市民社会」概念については、使う者によってその含みにかなりの差が見られるので、この点をいまい少し絞こんでいただければ、理解がより行き届いたように思われる。

第八章「製糸業とアメリカ市場」(井川克彦)では、製糸業の動向が、アメリカ市場の出現と輸出転換の過程を軸に分析されているが、1880年代に開かれたアメリカ向け輸出市場が、一定品質・太糸・荷口の均一・大量といった質的な要請を含むものであったことを明らかにしつつ、かかる輸出市場の変化に対応出来たのが、製糸密度のきわめて高かった改良座繰結社と器械製糸結社であったこと、そして製糸密度が低く、かかる市場の転換に対応することが出来なかった地域では、ヨーロッパ向け細筋生産への依存を強めることになったことが指摘されている。

本章の前提である同時期のアメリカ絹織物業の需要構造や生産システムについてより立ち入った分析が試みられれば、本章の議論がより動的に深められたのではないかというのが読後の感想である。また、印象深かったのは本章においても経営の地域的集積が、製糸業の存立と発展の大きな条件であったとされている点であろう。製糸結社の歴史的意味を、もう一度考えてみる必要があるのかもしれない。

第九章「貿易金融と横浜正金銀行紐育出張所」(上山和雄)は、横浜正金銀行の本格的な外為銀行への形

成過程を分析している。正金は、1880年代初めに直輸出荷為替に取り組んでいたものの、回収成績の不良と正貨流出に規制されてその方針を転換し、外国人荷為替に取り組むことによってニューヨーク市場でのプレゼンスを高めるとともに、出超による外為相場の上昇を緩和する役割をも果たすようになっていくが、80年代後半に入ると、遊金や官金そして自己資本による輸出為替取り組みを増大させ、さらには企業勃興によるロンドンからの輸入手形の急増により、ニューヨークからロンドンへの恒常的廻金の必要性が生じたため、80年代末になると有機的廻金網が形成されるようになっていったとされる。

正金の活動が、企業勃興過程との関係で動的に描かれている点で、本章からは多くのことを学ぶことが出来た。疑問に残ったのは、ニューヨーク出張所が、政府や本店の意向とすらすれたかたちで営業活動を展開していたらしいという点についてである。このニューヨーク出張所の独自の営業スタンスを律していたものについては、ニューヨーク側からの視点でいまい少し展開していただきたかった。

最後に第十章「米穀生産の拡大と対ヨーロッパ輸出の展開」(大豆生田稔)は、1880年代前半に停滞であった米穀生産が後半に顕著に上昇したのに対して、実質米価水準が80年代初頭の銀紙間格差による高米価を修正した後、後半期には安定的に保たれていたことを明らかにした。政府輸出を中心とした米穀の大量輸出が価格調節的に機能したことがその理由としてあげられているが、獲得された正貨が80年代後半の財政政策・国際収支対策に寄与するとともに、生産拡大下の相対的高米価を支えることで、農民所得の上昇＝農村購買力の拡大をつうじ、80年代後半の景気上昇をもたらしたことが解明されている。

本章に接することで、評者が当該期の景気循環と米穀生産の関係について抱いていた疑問のいくつかが解消されたことを述べておかなければならない。米穀輸出の価格調節機能を媒介環とした輸出と国内市場の二つのルートをつうじ、米穀生産の動向が景気の反転上昇に大きく寄与していたという理解は通説を批判して明快であり、この時期の農業人口の比重を考えると、その指摘はきわめて説得的である。ただし、1890年以降の輸出の途絶と輸入国化については、外国為替の変動によるものか、あるいはこの間に急速に米穀生産の比較優位が失われていったためか、叙述のかぎりではかならずしも明らかではな

かった。この点について論者の判断をお聞かせいただきたかった。

各論稿につき、その主題を個別に検討してきた。最後に、本書全体の読後感について触れておきたい。各章をつうじ、編者が「あとがき」で述べられているところの「最初の企業勃興の多面的解明」という課題はひとまず達成されているといえよう。通説的観点に批判的検討が加えられ、また野心的なアプローチが試みられている点は高く評価されてよいであろう。ただ読後いささか物足りなさを覚えたのは、民間銀行業についての主題的論究が含まれていないという点である。論文相互の関連を考えるうえでも、このことは惜しまれる。また評者としては、明治期の景気循環についての主導的研究者である編者に、序章とは別に、企業勃興過程の循環分析とその現在的位置づけにつき一章を割いていただきたかった。これらの章が加えられていれば、本書における企業勃興の歴史的イメージが、より鮮明なものになったのではないかというのが読後における評者の率直な感想である。

以上、気のつくままにやや批判めいたことを述べてきたが、このことは研究史の空白を埋める、企業勃興期日本経済についての最初の主題的な研究書であるという本書の価値をいささかも損ねるものではない。本書の成果のうえに、今後より多くの研究が積み重ねられることを期待して、本書評を終えたい。

[杉浦勢之]